Kurume City Plaza

久留米シティプラザ ユースプログラム 2023

新しい演劇鑑賞教室

事業報告書

2023年7月16日(日) ー 12月16日(土)

久留米シティプラザ

主 催　久留米シティプラザ(久留米市)　助 成　令和5年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

※本事業は、九州大学大学院芸術工学府、九州大学芸術工学部および久留米大学文学部国際文化学科と連携し実施しました

文化庁

目次

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」 2

企画監修者としての総括 3

各回の記録

前期

1 2023年7月16日(日)
イントロダクション・ワークショップ「境界線上で見わたしてみる」 5

2 2023年7月17日(月・祝)
『イミグレ怪談』関連事業 プレレクチャー「劇場で考える ～国際／交流～」 7

3 2023年9月2日(土)
神里雄大／岡崎藝術座『イミグレ怪談』鑑賞・対話の時間 9

後期

4 2023年11月11日(土)
イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～わたしらしさ～」 11

5 2023年12月16日(土)
映像展示の鑑賞・『定点観測』参加／鑑賞・対話の時間 13

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果 17

【寄稿】久留米大学文学部国際文化学科「文化と思想」との連携を経て 22

【寄稿】九州大学「身体表現演習特講／文化事業マネジメント特論」との連携 24

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」

久留米シティプラザでは、2022年度より、「知る／みる／考える　私たちの劇場シリーズ」と題して、独自の視点で時代を捉え、表現方法をも模索し応答しようと試みる意欲的な作品を上演しています。2023年度は『イミグレ怪談』『わたしのほころび』を上演しました。シリーズにあわせ、とくに次代を担う若者を対象に、作品鑑賞とアーティスト等との対話を組み合わせたユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」を行っています。

演劇は、娯楽として非日常の体験をもたらすものである一方、他者や社会との関わり方を学ぶツールでもあります。本プログラムは、演劇やアーティストを身近に感じてもらうことや、作品を通じて社会に目を向けること、対話や思考により視野が広がり、気づきが増えていくことを目的にしています。

事業概要

日　　程	前期：2023年7月16日（日）、17日（月・祝）、9月2日（土） 後期：2023年11月11日（土）、12月16日（土）
会　　場	久留米シティプラザ　Cボックス、中会議室ほか
企画監修	長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）
参 加 者	前期15名　後期14名
主　　催	久留米シティプラザ（久留米市）

※本事業は、九州大学大学院芸術工学府、九州大学芸術工学部および久留米大学文学部国際文化学科と連携し実施しました。

スケジュール

前 期

2023年7月16日（日）	13：00～16：00	イントロダクション・ワークショップ「境界線上で見わたしてみる」
2023年7月17日（月・祝）	14：00～17：00	プレレクチャー「劇場で考える～国際／交流～」・感想シェア会
2023年9月2日（土）	17：00～20：30	神里雄大／岡崎藝術座『イミグレ怪談』鑑賞・対話の時間

後 期

2023年11月11日（土）	13：15～16：45	イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～わたしらしさ～」・感想シェア会
2023年12月16日（土）	16：00～19：30	映像展示の鑑賞・『定点観測』参加または鑑賞・対話の時間

企画監修者としての総括

長津　結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」は2年目を迎えた。日本国内において、公立文化施設が実施しているもので、ユース世代を対象にした鑑賞支援のためのプログラムとしては、国内でもあまり例がないものだと感じる。

筆者自身は文化政策やアートマネジメントの分野の研究者でもあり、それと同時に演出家や音楽家などのような創作活動を行う人たちにアートマネージャーやドラマトゥルクとして伴走するような実践者でもある。そういった意味ではこのプログラムは、研究者としての側面と、実践者としての側面を併せ持った取り組みとして位置付けることができる。このような挑戦をする機会をいただけていることに対して、久留米市の皆様をはじめとして久留米シティプラザの職員のみなさんに心から感謝を申し上げたい。

そのうえで、このプログラムの意義について改めて考えてみたい。

まず、国内で評価が高まっている若手や中堅の芸術家の作品を上演することに大きな意義がある。ユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」で取り上げる作品は、同時に久留米シティプラザ「知る／みる／考える　私たちの劇場シリーズ」としてプログラミングされたものである。この上演作として選ばれたアーティストは、いずれも全国的に注目が集まっている新進気鋭の作家ばかりである。今年度の神里雄大さんは、既に多くの賞を受賞するなど評価が定まっており、さらには日本国内だけでなく海外でも上演歴を持つ。また百瀬文さんはメインのフィールドは現代美術だが、すでに現代美術の分野では国内外で名が知られた芸術家である。こうした芸術家の作品を久留米で上演するということは、久留米市民にとっても普段触れることが少ないような作品の形に触れることにつながるし、芸術家にとっても久留米というまちやそこに暮らす人に向けてどのような展開ができるのかという挑戦の機会になっていると考えられるだろう。

また、プレレクチャーとして実施されているトークの設計についても考えてみたい。県南地域を中心としたゲストを選定することを通じて、久留米シティプラザの新たなネットワークの構築に一役買っていると考えることもできる。設計プロセスとしては、まず毎回、「知る／みる／考える　私たちの劇場シリーズ」として上演する作品が久留米シティプラザ内部で決定した後に、どのようなトークにしたらいいだろうか、どのような導入を行うことでユース世代が作品のことをより深く理解することにつながるかだろうか、という観点でゲストを選ぶことになっている。その試行錯誤自体が、クリエイティブな時間でもあり、非常に価値があるものであると考えている。結果的に前期は「国際／交流」というテーマ、後期は「わたしらしさ」というテーマを軸にレクチャーを構築することになったのだが、ゲストの皆さんからいただいたお話は、直接作品自体に関係するものではない部分もあるにせよ、作品を理解することに間接的に役に立つ、知識

や考え方のフレームワークを提示してくれたと考えている。

また、参加者はこうした経験を踏まえて、作品を鑑賞した最後に「対話の時間」を一緒に過ごすことになる。この「対話の時間」については筆者自身がファシリテーターとして関わっているので、実際にどのような場として機能しているのかというのは述べづらいところもあるが、特に大切にしているのは、「対話の時間」でまったく発言をしないように見える参加者との向き合い方である。というのも私自身も実のところ、作品を見たあとに感想を誰かと共有したくなるタイプではない。作品を見終わったあとゆっくりと駅まで帰る道すがら、あれこれと作品について想いを巡らせるのが好きなタイプである。「対話の時間」に参加する人々はどちらかというと2回とも饒舌に話される方が多かったが、必ずしも語りが多くない参加者もいた。しかしそれは、ただ黙っているだけではない、という可能性に賭けたいと思い、筆者はファシリテーションを行ってきた。黙りながら、他の人の言葉を聞き、自らの中でさらに逡巡を深めること。それを、いつ言葉に出してもいいし、出さなくてもいい、という安全性を確保すること。そのような場づくりを行うことによって、劇場というのは正解がない場であり、どのような感想を持ってもいいのだということを伝えていきたい、と筆者は考えてきた。こうしたことを大切にすることで「対話の時間」は、潜在的なユーザーに対して、劇場という場がひらかれた「広場」であるということをアプローチするための大切な時間として機能しているのではないかと思う。

最後にプログラムの全体像を振り返った時に、行政内部との連携の機会ということでも今後の可能性が開かれているように思う。というのも、ここまでの2年間でユースプログラムで扱ってきたテーマというのが、多文化共生、介護福祉、ジェンダー・セクシュアリティなど、様々なテーマにわたっている。そしてこうしたテーマに関する仕事は、普段行政の方たちが行なっている仕事の分野や範囲とも重なりがあると考えられる。久留米シティプラザは、久留米市の直営施設である。近年全国の文化施設の動向を見ると、必ずしも指定管理者施設として運営している施設だけでなく、あえて直営施設として運営することによって、行政の強みを文化施設に生かしていくという相乗効果がもたらされるような事例も出てきたように思う。こうした直営施設としてのメリットを行政内部にも生かして推進していくような、相互関係を持った体制が今後ますます重要になってくることを感じている。その意味では、これまで本事業に辛抱強くお付き合いいただいた行政職員のみなさんにも心から感謝するとともに、行政における事業として本プログラムが何らかの形で機能しているとすれば幸いである。

次年度も引き続きこの事業は継続していく見込みである。ご協力いただいている関係各位に改めて感謝を申し上げるとともに、さらなるご支援をお願いしたい。

1

2023年7月16日(日)13:00〜16:00

イントロダクション・ワークショップ「境界線上で見わたしてみる」

会場:久留米シティプラザ 中会議室

進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)、神本秀爾(久留米大学文学部准教授)

13:00 イントロダクション

円形に並べた椅子に、参加者が自由に着席。

担当からユースプログラム全体の趣旨説明。進行役の自己紹介があった。

13:05 自己紹介

アイスブレイクを交えながら、参加者同士でお互いの名前を呼んでみる。

声を使わないコミュニケーションを取りながら、指示された順番に並んでみる。

「20年後の劇場」「20年後の自分」について、隣の人と話し合う。

14:05 ワークショップ「境界線上で見わたしてみる」

【前半】座学「移民・移住について」

休憩を挟み、4〜5人ごとのグループ4つに分かれ、まずイミグレーション(移民・移住)について座学で学んだ。

国際的に活躍する有名な方々の紹介のあと、イミグレーションという言葉がいちばん似合うのは誰か、似合わないのは誰かをグループで話し合う。多くのグループが「答えには辿り着けなかった」と回答し、その理由として、「移民と移住という言葉が相反しているのでは?」「イミグレーションが『境界を越えること』という定義であれば、この人物が当てはまる、といった回答はできる」「拠点が多くある方がいて、その方は移住というよりは放浪している感じに思える」といった意見が挙げられた。

こういった問題を考える場合に、反対語、つまり「定住」から考えてみる。そうすると、定住したい人間がどこにポジションを置くかによって、回答が変わることがわかった。

移民・移住につきまとう「境界」について考えるために、以下の3つの観点から学んだ。

1.移動の種類を分類する
2.わたしたちの「ルーツ」について考えてみる
3.境界との関係について考える

これらについてスケールを拡げて考えてみると、我々は生物種としては同じということは理解できるが、同時に国籍や民族という「境界」の概念が乗ることで、それらが障壁となって差異を感じさせたり争いが起こったりしていることがわかった。

最後に、「境界」の話を『イミグレ怪談』(※1)にも結びつけ、「生/死の境界も不明瞭なのでは?」「生/死も移動として捉えられるのでは?」といった話で座学は終了。

15:05 【後半】グループワーク「2043年7月16日の久留米について想像してみる」

グループワークでは、冒頭に「久留米市人口ビジョン」(令和2年発行・久留米市)を配布。日本国籍の人口減、外国籍の人口増が進む久留米市の近未来について次の問いが出され、前半の座学を踏まえてグループごとに30分でまとめた。

1.どのような人口分布か
2.豚骨ラーメンに代わる久留米名物ができているとしたら、どのようなものか?
3.関東や関西の大都市との関係はどうなっているか
4.どのような動機(目的)での移民が流行しているか
5.どのような絶望と希望があるか

出てきたアイデアを模造紙にまとめ、各グループ5分間程度で発表。いずれのグループも「今よりももっと多国籍化・多様化が進んでいる」と考えており、久留米市が多国籍化することを「希望」と捉えようとする見方で一致していた。

一方で、「独立国家久留米」や「久留米民族の誕生」といった言葉も見られ、多国籍化について想像することは同時に「内側」と「外側」(日本人と非日本人)の境界線を強く意識してしまう傾向があることもわかった。「境界線は人が作ったフィクション」という前半の学びが思い起こされる場面であった。

16:15 アンケート

<進行>

長津結一郎(ながつゆういちろう)
多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走/伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なうほか、音楽実技やワークショップに関する教育、演劇・ダンス分野のマネジメントやプロデュースにもかかわる。

神本秀爾(かみもとしゅうじ)
専門は文化人類学。2016年、ゼミ生を中心に、地域の魅力をテーマにした楽曲・映像制作グループ〈チクゴズ〉を立ち上げ、「みあれうた」など8曲を制作。

(※1)『イミグレ怪談』
越境する人々について描いてきた劇作家・演出家、神里雄大(岡崎藝術座)がタイやラオス、沖縄に滞在して制作。
焼酎のルーツを求めてタイ、ラオスへ移住した人、戦後、沖縄からボリビアへ移住した祖父を持つ人、なんとなく沖縄へ移住した若者など、時代も国もさまざまな登場人物たちは、自らや家族が選択した移住について語る。

1

2023年7月16日(日)13:00〜16:00

イントロダクション・ワークショップ「境界線上で見わたしてみる」

当日の様子

イントロダクション・自己紹介

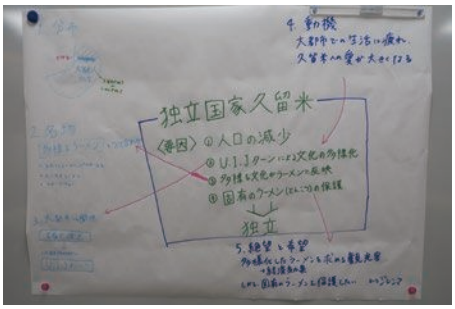
「呼ばれたい名前」を胸に貼り、その名前でお互いを呼び合う。名前を呼ぶことに慣れてくると、2人1組になってお互いの話を聞き合うワークも。

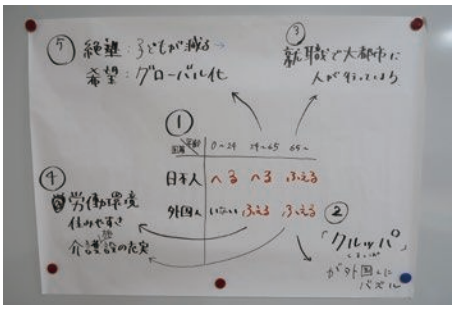
ワークショップ「境界線上で見わたしてみる」【前半】「移民・移住について」

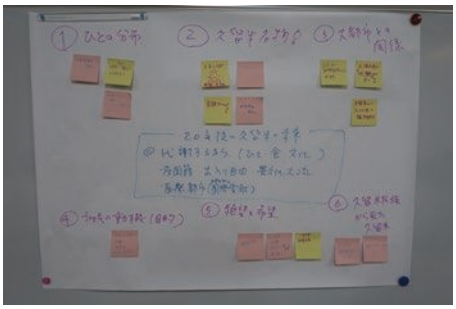
「イミグレーション」を入口として、普段あまり意識しない「境界」について、いろいろな角度から捉え直してみる。

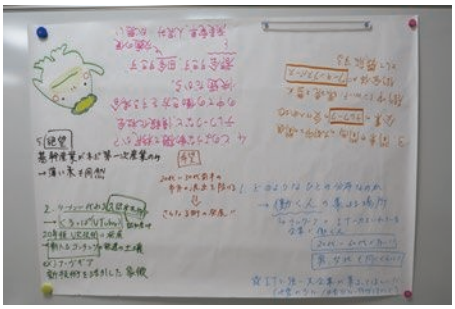
【後半】グループワーク「2043年7月16日の久留米について想像してみる」

30分で5つのテーマについて話し合い、模造紙にまとめる。地域について深く考えた結果、現実をシビアに見つめたアイデアが多く出てきた。









2

2023年7月17日(月・祝)14:00〜17:00

『イミグレ怪談』関連事業 プレレクチャー「劇場で考える 〜国際／交流〜」

会場：久留米シティプラザ 中会議室
ゲスト：城野敬志（art space tetraアートディレクター）、大和佐智子（専修学校久留米ゼミナール日本語学科 主任教員）
進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

14:00 はじめに

担当スタッフによるプレレクチャーの趣旨説明のあと、進行の長津氏の提案で、本日のテーマである「国際交流」について、自己紹介も交えながら参加者同士で話し合う。
その後、「理想の共生とはどういった形なのか」「線引き（ルール）のない社会が本当にいいのか」という問いかけから、本日のレクチャーで国際交流をどういうふうに考えればいいのかを探りたい、という趣旨説明があった。

14:20 大和佐智子さんによるレクチャー

大和氏が勤務する日本語学校では、2年間の在学期間中、単に日本語を教えるだけでなく、日本独自の文化やルールについても指導を行っている。はじめは日本留学に希望を持っていた留学生たちも、生活が進むにつれ、不慣れな環境に落ち込む。留学生たちは、いろいろな状況・背景の中、2年間で進路を決めなければならない。卒業後、彼らが日本の社会に溶け込める（線引きの内側に入れてもらえる）ようになるためには、母国と違う日本独自の文化やルールを、「なぜなのか」から厳しく教えるもことある。
今後、外国人留学生が日本社会を構成していく一員になっていくと思っている。彼らが日本社会に入り込んでくることで、「共生」の線引きも曖昧になっていくのでは。

14:40 城野敬志さんによるレクチャー

城野氏からは、芸術文化の観点から多文化共生を捉える話があった。
城野氏が行った「Layover展（※1）」では、アートを通してコロンビアと日本の交流が図られた。今から約100年前に行われたコロンビアへの移民政策は、開拓を主目的に進められたのではなく、芸術を介して始まった（※2）ものであった。
多文化共生社会とは、交流を重ねることで新たな価値観を生み出し、それを共有することが重要なのではないか。アーティストたちが多文化との交流を重ねて自身の表現を変化させていくプロセスを繰り返しながら、次世代が発展していくことに期待したい。

15:05 感想、質問など

参加者からは留学生の日本人との交流機会や、芸術文化と経済的豊かさについての質問などが出た。レクチャーのまとめとして、大和氏は「もし留学生が見えない存在だったとしたら、今日をきっかけに認識してもらえるとうれしい。そういう想いを持って『イミグレ怪談』を見てほしい」と語り、城野氏は「今日のアートの話と同様、『イミグレ怪談』も少しわかりづらい話かもしれないが、そのわかりづらいという感覚が重要だと思う」と語った。

15:45 感想シェア会

一般参加者退出後、ユースプログラム受講者でグループは分かれ、レクチャーの感想などを共有しあった。留学生の参加者は、自身の体験を交えながら感想を話してくれた。また、過去に3日間だけインターナショナルスクールを体験し、全くコミュニケーションが取れなかった経験から、言葉の壁に苦手意識があると同時に、留学生の不安に共感したと語ってくれた参加者もいた。あるグループは、アート作品そのものではなく、作品が展示されるまでの「交流」を含むプロセスに注目し、展示が成立してから観客に届くまでの過程に関する鋭い質問が投げかけられた。
いずれの感想や質問に対しても、ゲストの二人は「コミュニケーション」と「アート」の側面から真摯に答え、参加者の意識や捉え方、考え方が変わるきっかけとなるような言葉が投げかけられた。
長津氏からユースプログラムの参加者に改めて最後の一言を求められると、城野氏は「わかりづらい、というのは文化芸術全般に言えることで、わかろうとしすぎるのはよくない。理解することが目的ではない」と話し、大和氏は「わからないことをわからないと言うのはとても大切」と話した。

17:00 アンケート

<ゲスト>

城野敬志（じょうのたかし）
2006年より「共同アトリエ3号倉庫」にてアート活動を開始。2007年に企画した「九州アートをめぐる旅」をきっかけに九州全域でアートプロジェクトを展開。2019年から「art space tetra」運営メンバー。2021年からは福岡県の旧浮羽郡周辺とコロンビア日系移民の関係を調査している。

大和佐智子（やまとさちこ）
大学卒業後、日本語教師として1年ほど中国の学校で勤務。帰国後、現在の学校で、留学生（日本で大学や専門学校への進学や就職を希望している学生）に日本語を教えている。日本語母語話者と日本語を母語としない方とのミュニケーション手段である「やさしい日本語」の普及活動も行う。

（※1）Layover展
約10日の会期間、art space tetraでコロンビア在住作家の写真・映像作品を中心に展示。会期中にはオンラインで日本とコロンビアの交流イベントも行われた。

（※2）芸術を介して始まった
日本からコロンビアへの計画移民政策は、コロンビアの詩人ホルヘ・イサークスによる恋愛小説『マリア』の翻訳がひとつのきっかけになったと言われている。『マリア』に描かれた風景に魅了された日本人たちが農業実習生としてコロンビアに移住し、その後三度の計画移民が行われた。

2

2023年7月17日(月・祝)14:00〜17:00

『イミグレ怪談』関連事業 プレレクチャー「劇場で考える 〜国際／交流〜」

当日の様子

はじめに

「国際交流」について自分たちの考えを話し合ったのち、長津氏による社会的包摂の紹介があった。

プレレクチャー

大和氏・城野氏によるレクチャー。国際的な交流を通して、他文化／多文化と共生することの現実的な側面についての話があった。

感想シェア会

参加者自身が過去に経験した、異文化交流を行う際に感じた不安について話す場面も。

3

2023年9月2日(土) 【公演】17:00〜19:00 【対話】19:15〜20:15

神里雄大／岡崎藝術座『イミグレ怪談』鑑賞・対話の時間

会場：【公演】久留米シティプラザ Cボックス 【対話】久留米シティプラザ スタジオ2

進行：長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

ゲスト：神里雄大(劇作家・舞台演出家)

17:00 神里雄大／岡崎藝術座『イミグレ怪談』公演鑑賞

あらすじ(岡崎藝術座公式サイトより抜粋)

同窓会があるからと集った3人。焼酎のルーツを求めてタイに渡り、そこで出会った女に魅せられた話をする者、遠くの地に移住した人たちの物語を話す者、沖縄の幽霊について語り出す者。酒、年金、お祭り、戦争、未来、死、バーベキュー、前世、話は多岐に渡り・・・どうも3人の会話は噛み合わない。それどころか、どうやらお互いに見えているのか、見えていないのかさえ怪しい。
頭上に輝くのは満天の星空か爆弾の光か——、彼らの語りから見えてくるものとは?

移動し、越境する人々をテーマにした作品を発表している劇作家・演出家の神里雄大／岡崎藝術座。『イミグレ怪談』ではラオス、タイ、ブラジル、ボリビア、そして沖縄を舞台に、それぞれの土地にまつわるエピソードが語られる。
主要な登場人物3名は、それぞれが出会った幽霊(のようなもの)の話をするが、次第に自身が幽霊のようにも見えてくる。物語を追うような形式ではない作品であるため、鑑賞者によって解釈が分かれる内容であった。

19:15 対話の時間

会場をスタジオ2に移して、公演の感想をシェアしあう。
はじめに、進行の長津氏から、「言葉にできるひとが言葉にすればよく、全員が一言はしゃべらないといけないような空気にはしたくない」という話があった。この時間の趣旨が「一緒に作品を観たという経験を共有すること」にあり、正解を求めて発言する必要はないということが確認された。

最初に本編の核心ではないシマウマのお面についての感想が出たのをきっかけに、ざっくばらんに個々の感想を言いやすい空気が生まれた。抽象的な表現が多かったため、「あれはなんだったのか?」という問いが生まれることが多く、そのたびに、互いに自分の捉え方について話すという流れができた。

時間が経つにつれ、登場人物の名前、衣裳、舞台美術や小道具、作品タイトルなどについて、自身の捉え方・解釈の仕方の発表が活発になり、進行の長津氏を含めた参加者全員がそのユニークな発想に驚かされる、という場面が増えていったが、その反面、謎解きのような空気にもなりつつあった。

対話の時間も終わりに近づき、これまで一言も発していなかった参加者から、同窓会というシチュエーションに対する自身の体験をもとにした感想が話され、改めて、本作はわかりやすいストーリーじゃないからこそ、そこから漏れてしまったものを捉えることができる作品であったという認識が生まれた。

途中から会場に入ってきた作・演出の神里氏は、感想のひとつひとつを興味深く聞いており、締めとして、解釈の正解は特に設けていないこと、感想を聞いて作り手が気付かされることが多いこと、初演から時間が経ち、作品を客観的に捉える距離感が出てきたこと、そして、創作時は無意識下でやっていることが多いのため、「なんでこれをやったのか」と問われても答えられないことが多いことなどを話し、この場は終了した。

20:15 アンケート

アンケート記入後、自由退出となったが、高校生の参加者が数名で神里氏を囲んで熱心に質問をするという場面が見られた。

<ゲスト>

神里雄大(かみさとゆうだい)
劇作家・舞台演出家。日系ペルー人の父と北海道札幌市出身の母の間にペルーのリマで生まれ、生後半年ほどで日本へ移住、神奈川県川崎市で育つ。2003年に「岡崎藝術座」を結成。2018年『バルパライソの長い坂をくだる話』で第62回岸田國士戯曲賞受賞。
各地を訪問し採集したエピソードを元に、移動し越境する人々をテーマにした作品を発表している。

3

2023年9月2日(土) 【公演】17:00〜19:00 【対話】19:15〜20:15

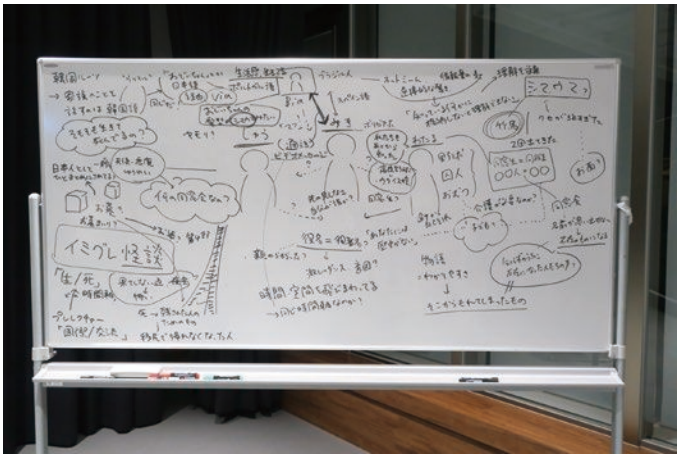
神里雄大／岡崎藝術座『イミグレ怪談』鑑賞・対話の時間

当日の様子

対話の時間　進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

劇中で疑問に思った箇所などを挙げ、それについての解釈を話し合う。

すべての感想を興味深く聞いていた、作・演出の神里雄大氏。最後に「対話の時間」に対しての感想を話した。



終了後

作者である神里氏に、自発的に疑問や感想を投げかける高校生の参加者の姿も。

4

2023年11月11日(土)13:15〜16:45

イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える〜わたしらしさ〜」

会場:久留米シティプラザ 中会議室・展示室
ゲスト:五十嵐ゆり(NPO法人Rainbow Soup 代表)、渡邉如心(信覚寺住職/みなみ幼稚園園長)
進行:長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

13:15 イントロダクション

円形に並べた椅子に、参加者が自由に着席。
担当から後期ユースプログラムの趣旨説明。進行役の自己紹介があった。

13:20 自己紹介

アイスブレイクを交え、参加者同士でお互いの名前を呼んでみる。次に、声を使わないコミュニケーションを取りながら、指示された順番に並んでみる。制限されたコミュニケーションを経て、「やむにやまれぬ状況になると、表現が生まれる」ということを体験した。
続いて、「自分らしい」と思うときと、「自分らしくない」と思うときについて、隣の人と話し合う。

14:30 プレレクチャー「劇場で考える〜わたしらしさ〜」

会場を展示室に移し、一般参加者も交えてのプレレクチャー。まずはアイスブレイクとして、近くの参加者4名程度で「自分らしい」と思うときについて話し合う。

最初に五十嵐氏のレクチャー。レズビアンであることをオープンにして、LGBTQ支援団体の活動を行う五十嵐氏は、「わたしらしさ」について話すときはいつも、まず「レズビアンとはなにか」という説明から始めないといけないと語る。自分のアイデンティティについて話す前に、まず前提(基礎知識)の説明を求められるこの社会は、どこまで多様なひとを受け入れられるようになっているのかと投げかける。

続いて渡邉氏のレクチャー。1歳半から習っていたというバイオリンの話を例に、ドとミの和音があるとき完全に融和し、今までに聴いたことのない音が聴こえたという体験が、自身の人生観のベースになっていると話す。異質なふたつがずっとぶつかりながらも対話を続けることで、全く違う新しい立場が見つかる、いわゆる仏教における「中道」という考え方に通じており、自分らしさや、私と他人の境界線について考えるとき、衝突を恐れず「中道」が見つかることを意識してほしいと語った。

両氏のレクチャーを受け、参加者同士で感想を共有し合った後、五十嵐氏、渡邉氏でのディスカッションを経て、「百瀬文氏の作品をこの時代に一緒に見ることの意味」についてのコメントをもらう。
渡邉氏は、意味を求めてアートに触れたことがないので回答が難しいと言いながらも、自身が作品に触れた際の感想について語った。五十嵐氏は、わからないものを無理にわかろうとせず、わからないままにする、ただ存在することを受け入れることが大事なのではないかと語る。両者共に、作品に触れて、ネガティブな反応も含めていろいろな感情が自身の中に沸き起こることを楽しんでほしいと話した。
最後に質疑応答が3つほどあり、一般参加者を交えたプレレクチャーは終了。

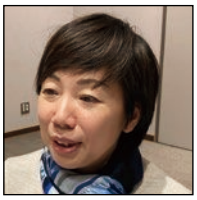
16:10 感想シェア会

今回のレクチャーを経て「自分らしさ」について考え方がどう変わったか、グループディスカッションを行う。プレレクチャーの一般参加者も3名残り、5つのグループで感想を出し合った。

いずれのグループも、「自分らしさ」を改めて考え直す契機となったようだ。と同時に、「他者の自分らしさ」について、尊重の仕方がわからないといった感想もあった。また、プレレクチャーの一般参加者からは、アンケートの設問にある「境界線」(※1)という言葉への投げかけがあった。
これらの感想を受け、五十嵐氏・渡邉氏は、自分のなかに沸き起こった問いや感覚・感情を大切にしてほしいと締め括った。

16:45 アンケート

<ゲスト>



五十嵐ゆり(いがらしゆり)
2012年、LGBTQ支援団体Rainbow Soup発足。2015年にNPO法人化し、レズビアンであることをオープンにする。2018年、レインボーノッツ合同会社を設立し、SOGI・LGBTQをテーマにした企業・自治体向け施策支援・社外相談窓口対応を展開。2023年4月より、NPO法人プライドハウス東京・共同代表に就任。筑紫女学園大学非常勤講師。

渡邉如心(わたなべにょしん)
浄土真宗・本願寺派の僧侶。寺院という伝統に拘束された空間を、人間同士が枠組みをこえて交わることのできる場へ。定期的に対話型大人の学び舎「寺LOGOS」を開催している。専門は初期大乗仏教。サンスクリット語で書かれるインド原典を、漢訳やチベット語訳と比較しつつクリティカルに読み解くことに、秘かなよろこびを感じている。

(※1)「境界線」
プレレクチャーの参加者アンケートには、「『自分と他人の境界線』について、あなた自身の身の回りや、社会全体で課題となっていることはどのようなことだと思いますか?」という設問があった。

4

2023年11月11日(土)13:15～16:45

イントロダクション・プレレクチャー「劇場で考える～わたしらしさ～」

当日の様子

イントロダクション・自己紹介

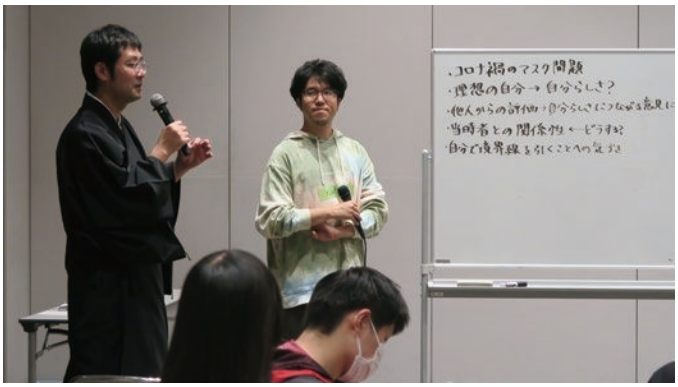
「呼ばれたい名前」を胸に貼り、その名前でお互いを呼び合う。名前を呼ぶことに慣れた後、言葉を使わないワークも行った。

プレレクチャー「劇場で考える～わたしらしさ～」

五十嵐氏・渡邉氏の話を通して、違った角度から「自分らしさ」について考えてみる。

感想シェア会

今回初めて、任意で残ったプレレクチャーの一般参加者も交え、ユースプログラム参加者とは違った角度からの感想が出てきた。



5

2023年12月16日(土)16:00〜18:50

映像展示の鑑賞・『定点観測』参加／鑑賞・対話の時間

会場：久留米シティプラザ スタジオ・Cボックス・小会議室
進行：長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)
ゲスト：百瀬文(美術家)

16:00　映像展示の鑑賞

『Social Dance』『Jokanaan』『山羊を抱く／貧しき文法』という各々10分程度の映像展示3作品を、任意で鑑賞する。

17:00　参加型パフォーマンス作品『定点観測』参加／鑑賞

参加型パフォーマンス作品『定点観測』は「参加者」と「鑑賞者」のどちらかを選んで入場する。ユースプログラム参加者は10名が参加し、2名が鑑賞した。

舞台には15脚の椅子が円形に並べられている。観客のうち、「参加者」15名が舞台上の任意の椅子に座る。椅子の上には質問用紙が置かれており、全員内容の異なる14問の設問が書かれている。10分程度の回答時間ののち、一人ひとり順番に回答だけを読み上げる。すべての回答を読み上げたのち、「参加者」と「鑑賞者」は、録音されたものを聞く。回答はところどころ、意図的に用意されたメッセージのようにも聞こえる。

17:50　対話の時間

『定点観測』終了後、会場を小会議室に移し、対話。

まず進行の長津氏より、「映像展示、『定点観測』ともに言葉にしにくい不思議な作品だったと思う。この対話の時間を経ても、『わからなかったことがわかる』ようにはならないと思うが、体験した時間の解像度を上げられれば」という、今回の目的の説明があった。

まずは映像展示『Social Dance』について、「ずっとヒヤヒヤしながら見ていた」「手を押さえたくなる人の気持ちも、女性の気持ちもわかる」「イライラ、やきもきした」といった感想が上がった。ユースプログラム参加者のうち、普段車椅子を使用している参加者からは、「女性は寝たきりというわけでもなさそうだし、体を起こせばいいのに」「自分がこんな態度で家族と接していたら、親にキレられそう」「寄り添ってほしいなら、それなりの態度も必要だと思う」といった感想があった。自身も普段から、作品で扱われているようなことを考えながら暮らしているという。

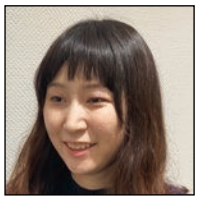
『定点観測』は、「参加者」と「鑑賞者」で感想の違いが見られた。
「参加者」からは、「違う質問への回答がつながって意味を持つ文章になった瞬間に怖く感じた」「答えを読み上げる順番を間違えてしまい、不協和音になってしまったのではないかと不安になった」「録音を聞いて、物語を読むような口調になっていったことに初めて気づいた」「他の人の文脈と合わさることで、自分の言いたかったことが変わっていた」といった、知らないうちにあやつられていることへの怖さのような感想が多く出た。
「鑑賞者」からは、「質問が全員違うとはわからなかった」「長い物語をみんなで読んでいるように見えた」といった感想が出た。

ここで、進行の長津氏より、「百瀬さんはどうしてこれらの作品をつくったのか」を周りのひとと話してみようという投げかけがあり、そこから、作品単体ではなく、今回の作品群についての感想が出るようになった。
あるグループからは、「映像展示はいずれも、わかりあえない、つながりあえないというコミュニケーションの難しさに焦点を当てたのでは」「『定点観測』では、もともとわかりあえないけど、つながりあえることもあるんだよということを表現したのでは」といった感想が上がった。また、他のグループからは「百瀬さんは人間の嫌な側面を見せる時間を作りたかったんじゃないか」といった感想が出た。

最後に、構成・演出の百瀬氏も対話の時間に立ち会っていたことが明かされ、この対話の時間について、「作者の予想を超える、そのひとの経験じゃないとわかりえない話が出てきて、そういうフィードバックが得られる場として面白かった」と感想を語って終了した。

18:50　アンケート

<ゲスト>



百瀬文(ももせあや)
映像によって映像の構造を再考させる自己言及的な方法論を用いながら、他者とのコミュニケーションの複層性を扱う。近年は映像に映る身体の問題を扱いながら、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。

『Social Dance』
手話を巡るコミュニケーションをテーマとした作品。耳の聞こえない女性と耳の聞こえる男性とが分かりあおうとしながらもすれ違うさまを映し出す。

『Jokanaan』
向かい合わせで並んだ画面には、男性と女性が映し出される。男性の動きをモーション・キャプチャーでデータ化しつくられたCG映像が女性であるとわかる。男女2名が配置されることにより、鑑賞者はその関係性に意味を求めるかもしれない。主体がどこにあるのか、また感情の所在について問う。

『山羊を抱く／貧しき文法』
かつての戦争でヤギが兵士たちの性の処理対象として使われていたという話をもとに、人として動物の悲しみを共感しようと試みたもの。

参加型パフォーマンス作品『定点観測』
百瀬からの問いかけに応える自分の言葉と声が、他者のものと重なり合い、自分の制御を超えていくこと、それと引き換えに1つの「作品」が立ち上がっていくことを体験する。

5

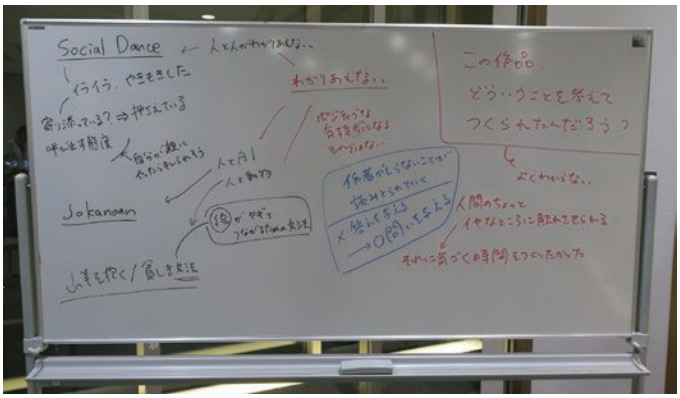
2023年12月16日(土)16:00〜18:50

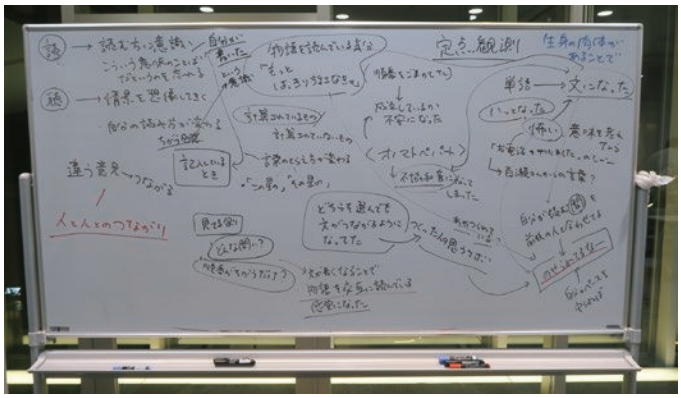
映像展示の鑑賞・『定点観測』参加／鑑賞・対話の時間

当日の様子

対話の時間

感想を言葉にするのが難しい作品ではあったが、自身の体験と結びつけた感想が多く上がった。





構成・演出の百瀬文氏も対話の時間に立ち会い、最後に「アーティストというのは作品を通して問いを投げかける存在」という話をした。

アンケートより

「イミグレ怪談」感想抜粋

他の人がどこに着目しているのか、自分には無い視点で色々な話を聞けておもしろかったです。ぼやっとしたまま考えていたのが、他の人の話を聞いたことではっきりした部分や内容が深まったところがあって、一人で考えるより多くのものを得られた気がしてよかったです。

鑑賞後は感動や高揚感のような熱いがどこかもやもやとした感想、感情を抱いていたが、対話の時間を通して登場人物に対する理解や考察をすることができるようになった。ただ、ここで得た作品に対する考えはあくまで主観的な自己の所有物であって、人に強制したり、正解に見せようとしたりすることはしてはならないことも理解できた。

今回鑑賞した「イミグレ怪談」について、怪談の舞台となっていた場所について考えさせられることがあった。みきさん、Biaさんの一見、会話しているように見えて実は互いに一方通行になっていた対話や、不自然に上方へ延びる坂、三角巾や天使の輪の演出など、そこが浮世此岸のようなものではない、この世ならざる空間であったのではないかと感じた。
精霊であるはずのシマウマや霊と神は紙一重という話、そこから連想される第4部での酒（神酒）など、そのほかにもまるでこの世ではないかのように感じられる要素がいくつかあって興味深いと思った。

神里雄大/岡崎藝術座『イミグレ怪談』@那覇文化芸術劇場なはーと 小劇場　撮影:大城亘

アンケートより

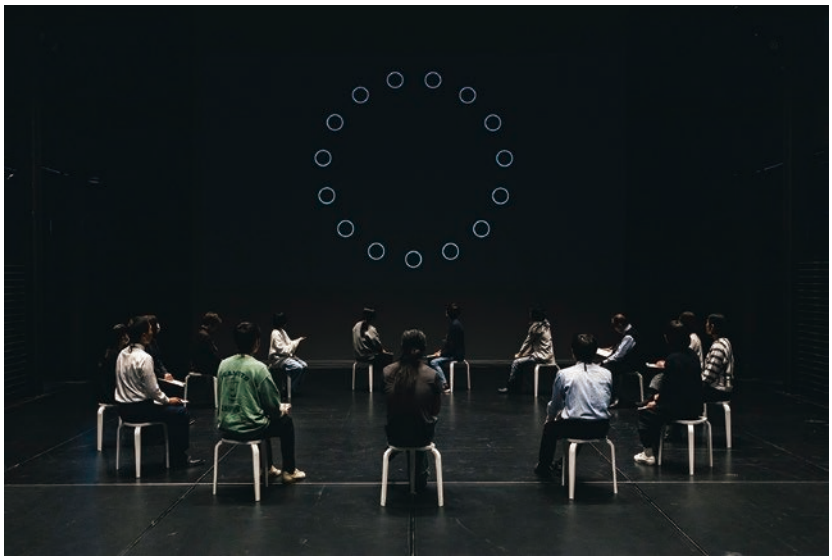
「わたしのほころび」感想抜粋

映像作品を通してコミュニケーションの難しさが改めてわかった気がする。また、実際に「定点観測」の参加者になってみて、形の見えない誰かにあやつられている気がして、少し怖さを感じた。

作者が何を伝えたかったのか、という点よりも自分が何を考えているのか、どんな問いが生まれたのか確認できてよかったです。

「定点観測」から周りの人にのせられているなって感じたり、文章になることで筆者の考えていた答えを答えていると感じたりすることで、自分自身普段の生活で周りに流されて生きていることを実感しました。もっと自分なりの考えを大切にして生きていくべきだと思いました。

映像展示『Social Dance』@久留米シティプラザ　スタジオ



参加型パフォーマンス作品『定点観測』@久留米シティプラザ　Cボックス

ユースプログラム参加者へのアンケート分析の結果

ユースプログラム参加者には毎回のプログラム終了後にアンケートをとった。ここではそのアンケートのデータを用いた分析を紹介する。

アンケートは各回ごとに取り、延べ回答数は前期で42件、後期で26件あった。アンケートは自由記述のほか、以下の項目に対してそれぞれ5段階評価をしてもらった。

Q1　参加した内容に満足した（12/16は「参加、鑑賞した内容に満足した」）
Q2　芸術作品への興味関心が高まった（11/11は「わたしのほころび」と明記）
Q3　久留米シティプラザの企画への親しみが増した
Q4　新たな気づきや発見があった
Q5　対話することが楽しくなった
Q6　地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった

全体的な満足度

まず全体のアンケート結果を平均すると、図1-1、図1-2のようになった。

図1-1

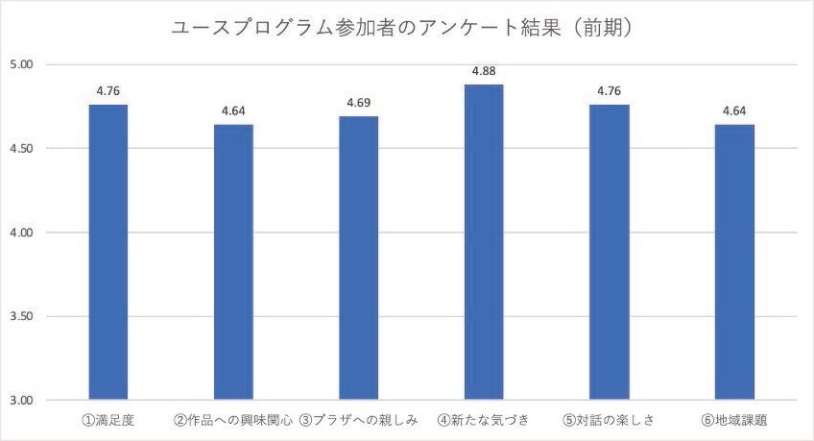
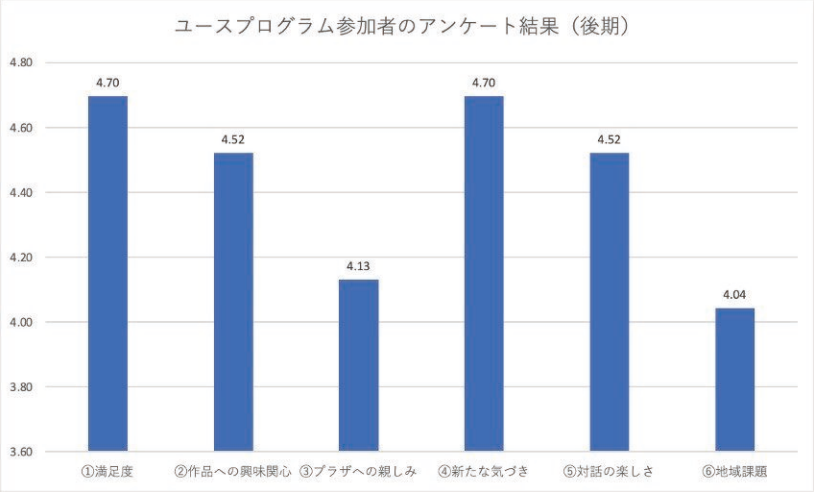


図1-2



このことからは、「新たな気づきや発見があった」「参加した内容に満足した」「作品への興味関心が高まった」「対話することが楽しくなった」といった項目は前期・後期ともに高く評価されていることがわかる。その一方、「久留米シティプラザの企画への親しみが増した」「地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった」という項目については前期に比べて後期がややポイントを落としたことがわかる。ただし昨年度と比較するといずれも4.0を超えていることから、総じて今年度の事業に関する満足度は高かったことが伺える。

次に、各回答の平均の推移を期ごとにまとめた。

図2-1

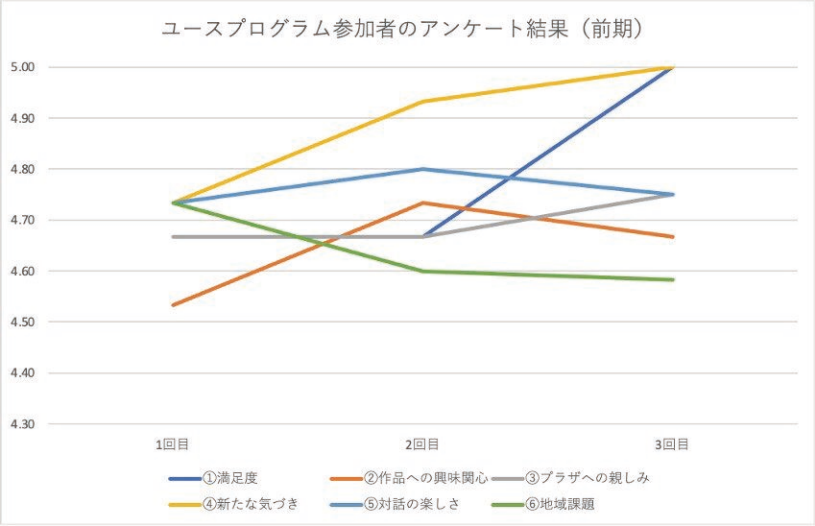
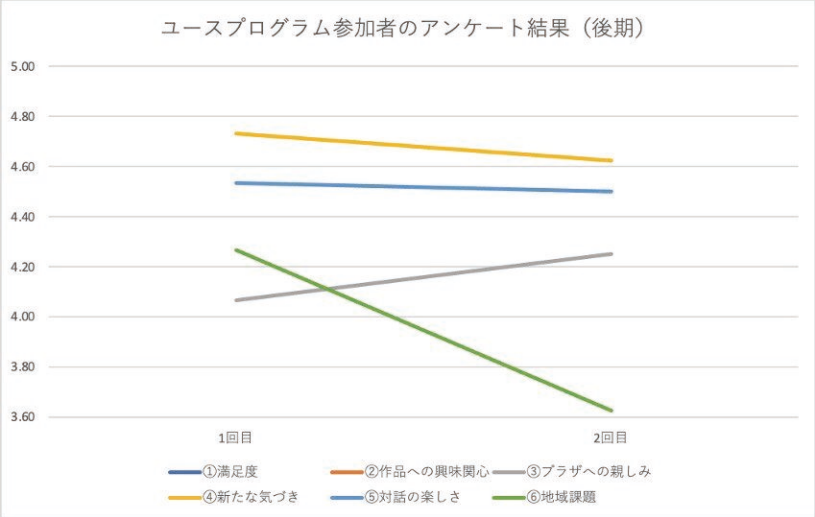


図2-2



＊①満足度と④新たな気づき、②作品への興味関心と⑤対話の楽しさについてはそれぞれまったく同一の値となっている

この結果からは次のようなことがわかる。

◯前期

- 「参加した内容に満足した」については、1回目・2回目と比べて3回目が格段に上昇している。また同様に、「新たな気づきや発見があった」についても3回目になるに従って上昇している。
- 一方、「芸術作品への興味関心が高まった」「対話することが楽しくなった」の項目については3回目にやや減少傾向にある。

◯後期

- 全体的に1回目に比べて2回目が減少傾向にある。特に「地域や社会における課題を自分のこととして考えるきっかけになった」の項目については大きく減少傾向にある。

このことからは、前期については平均的な満足度は非常に高く、作品が新たな気づきや発見を促すような契機となっていたこともわかる。その一方、後期についてはプレレクチャーでは一定程度の満足度や効果を生み出していたことがわかるが、実際の作品鑑賞・参加においてその効果が十分に継続していなかったこともわかってきた。

自由記述から見た考察

最後に、毎回のアンケートにおける自由記述をもとに、前期と後期のプログラムの特徴を検討する。分類にあたっては実際の回答内容を抽象化し、グルーピングを行ったうえで、紙幅の限りストーリーラインを構成した。

◯前期

ワークショップについては、内容面では移民・移住・境界などをテーマとした問いかけに答えがなく考えさせられるものだったという声や、境界線や移動の問題は簡単に説明し難いという考えに至ったという声があった。全体の雰囲気として、とても自由なコミュニケーションの場であったことや、初対面であっても仲良くなれる雰囲気があったという声があった。

プレレクチャーにおいては、国際交流に関するモチベーションが上がったという声がある一方、「国際交流とはいっても、親しい友人とですら「この話の意味伝わってないな」と感じる位なので、無理に気負う必要もないなと思った」というような、コミュニケーションについて考察する声があった。また、国際交流が他人ごとではなく自分ごとであることへの気づきや、日本の人がどのように思われているのかに立ち止まるような考察も見られた。そのほか、芸術の捉え方が更新されたり、作品そのものではなくその背景に注目するという視点が得られた様子がみられた。今回だけで消化できないという意見もある一方、抽象的なテーマであることにより捉え方が広がる良さがあるという指摘もあった。また、一方的なレクチャーだけでなく対話がメインだったことで発見や疑問が多く得られたという声もあった。

『イミグレ怪談』については、一回だけで理解できず副音声でもう一度見たい、照明や音響の使い方が印象的だった、怪談の舞台となっている場への考察、作品が伝えたかったのは「偏見」というテーマだったのではないか、という意見があがっていた。また終演後の対話の時間については、「鑑賞後は感動や高揚感のような、熱いがどこかもやもやした感想・感情を抱いていたが、対話の時間を通して登場人物に対する理解や考察をすることができるようになった。ただ、ここで得た作品に対する考えはあくまで主観的な自己の所有物であって、人に強制したり、正解に見せようとすることはしてはならないことも理解できた」という意見のように、対話の時間の充実度を語る声が多かった。「ユース向けに限らない、大人向けの演劇教室、レクチャーのようなものもやってもらいたい」という声もあった。

◯後期

プレレクチャーにおいては、「わたしらしさ」がテーマだったこともあり、自分らしさについての省察や、新たな視点や考え方を得るきっかけとなっていたり、他者に対する接し方についての振り返りとなっていることがうかがえた。さらには「自分の土俵だと思っている二次元創作にあてはめて考えるのもおもしろそう」と、自らの芸術実践と重ね合わせて考える参加者もいた。またレクチャー内容を通じて、芸術は答えではなく問いであるという気づきが生まれたり、LGBTQに関する思考の変化が生まれた参加者もいた。さらには、プログラム自体がワークショップを行ってからのレクチャーという形で、プログラムの構成による理解の深まりがあったという声や、対話を通じた考

えの交換の大切さを知ったという声もあり、次回以降への期待が高まっていた。

『わたしのほころび』については、映像作品にコミュニケーションの難しさを感じたという声や、はっきりと感じることができない複雑な作品を自由に解釈する面白さを語る声があった。また、『定点観測』について、参加者によって異なるパフォーマンスになることへの気づきについて言及する声もあったうえで、「自分自身普段の生活で周りに流されて生きていることを実感」というような、形の見えない何かに動かされている感覚が生まれ、それが日常と接合していったという話もあがっていた。また、終了後の対話の時間などでの話から、作者の意図ではなく、自らに生まれた問いを意識することが大切なのではないかという意見があがっていた。

寄稿

久留米大学文学部国際文化学科「文化と思想」との連携を経て

神本　秀爾（久留米大学文学部国際文化学科教授）

久留米大学文学部国際文化学科が久留米シティプラザの「新しい演劇鑑賞教室」と連携するのは2年目である。昨年度は「異文化体験実習II」という科目で学生を募集しおこなった。今年度は新規開講科目「文化と思想」で連携をおこなった。その理由は学生の学びという点から継続的な連携を進めることの意義を強く感じたためである。本科目の目的には以下の三つ、「哲学的な思考回路を身に着けること」「生きるとは何か、幸せとは何かなど人文学の礎となる考え方を身に着けること」「文化芸術活動の意義に対する理解を深めること」を掲げた。この科目を通じての学生の到達目標としては、「文化芸術の意義について自身の経験を交えながら言葉で表現できるようになること」を掲げた。つまり、学生は「新しい演劇鑑賞教室」に「文化と思想」という授業科目として参加するということである。受講生は13名いたが最終的なレポートまで提出した学生は2年生5名（男1女4）、3年生4名（男1女3）、4年生2名（男1女1）の計11名であった。本学科学生の男女比と比較しても女子学生の受講割合が高かった。

詳細に先立って所感を述べると、今回の「新しい演劇鑑賞教室」への参加を通じて、筆者の期待を超える感想が多くの受講生から出てきていたという点で非常に有意義なものだったと感じている。以下に大学での事前学習の内容、プレレクチャー「劇場で考える～わたしらしさ～」および、百瀬文の「わたしのほころび」に参加した学生の様子や感想から得た所感と今後久留米シティプラザに期待することについて述べていく。

近年、筆者が主たる専門とする文化人類学分野とアート分野の境界を横断するような試みも少なくない。「わたしのほころび」には筆者がプロジェクト監修として関わっていた。「わたしのほころび」は映像3点の展示と参加型パフォーマンス『定点観測』を組み合わせたものである。「わたしのほころび」をまとめ上げていく際の主たるキーワードが自己の存立の基盤と重なる「主体」という哲学的概念であった。具体的には主体とジェンダー、技術や動物との関係、主体の複数性を念頭に置いていたことから、大学での事前学習では主体をめぐる簡単な講義をおこなった。

11月11日は五十嵐ゆり氏と渡邊如心氏によるプレレクチャーに参加した。それぞれ、ジェンダーとわたしらしさの関係、わたしらしさそのものについての話が中心であった。レクチャー終了後のプログラムとして、学生は一般からの参加者と簡単な意見の交換や共有をおこなった。学生のコメントを見ると、誰しもが迷うわたしらさしさ（そのひとらしさ）について、学生が自身の経験と共鳴させながら自身の考えを深める機会になっていたことが伝わってくる。たとえば、自分にとってのわたしらしさは「綺麗になろうと前進しているとき」と考えたという学生がいた。彼女は自分以外の多くのひとがわたしらしさとして趣味や特技、性格をあげていたことを踏まえ、わたしらしさとは「いまの自分を構成している要素の中で最も大きい要素かつ好きであること、または長く続けていて染みついている行動や志向」であると彼女

なりに理解するに至っていた。その場での対話を通じて自分なりに思考を言語化させたのは彼女ばかりではないはずである。現に「それぞれの意見を聞くことでより本質に近づいて行っているような感覚があった」という感想もあった。この点で対話を前提としたプレレクチャーは、日常生活に根差した経験をもとに哲学し合う場所として機能していたと言える。

「わたしのほころび」は12月15日から17日にかけての映像展示と、16日と17日の参加型パフォーマンスで構成されていた。学生は期間中に3つの映像作品『Social Dance』『Jokanaan』『山羊を抱く／貧しき文法』を鑑賞し、『定点観測』に参加、または鑑賞した。

『Social Dance』はろう者の女性とそうではない男性のやり取りを中心に構成された作品であり、次々に不満を発する女性の手を男性がおさえつけるシーンが印象的な作品である。学生のコメントにはお互いのやり取りのすれ違いに「もやもやした」というものが最も多かった。『Jokanaan』はモーションキャプチャーで制作されたはずのCGのサロメと、その動きの元となった男性がそれぞれの画面に映し出される作品である。この作品については「理解が難しかった」というコメントと技術へのコメントが多かった。『山羊を抱く／貧しき文法』は山羊が性処理の道具とされていたことをモチーフにした既存の絵画「獣姦」を絵具ではなく食紅で描いた主人公が、山羊にその絵を食べさせようとする物語である。この作品についてはその試みに対して「不愉快」や「苛立ち」というコメントが多かった。

筆者はいずれのコメントも前向きに評価している。なぜなら、もやもやした経験や理解できなかったという記憶、不愉快や苛立ちという経験も自分自身を問い直し、自分自身や社会についての理解を更新していく大切なきっかけとなるからである。

映像展示の鑑賞はそれぞれのタイミングでおこなったが、『定点観測』は学生たちが同じ空間に居合わせておこなわれた。この作品は百瀬によって準備された、それぞれ異なる質問紙を持った参加者たちが、順番に回答を読み上げていくというパフォーマンスである。学生は参加者と観察者とに分かれてその場に参与した。最も多かったのは、それぞれの回答が文章らしい意味を持った際に「恐怖」や「不気味さ」を感じたというものだった。しかし合わせて「いままでに体験したことのない感情の波が短時間で起こった」というコメントや「制作者の意図に乗るものかと反発しようとした」というコメントなどもあった。これらを総合したような「非日常空間で、体験したこともないような不思議な時間を過ごすことができて非常に面白かった」というものもあった。

以上のことから、今年度の連携では「哲学的な思考回路を身に着ける」「人文学の礎となる考え方を身に着ける」という目的と「文化芸術の意義に対する理解を深める」という一見するとフェーズの違う目的がうまくつながったと言えるだろう。久留米シティプラザとは今後も、学生と共に「哲学できる」ようなプログラムを考えていければ幸いである。

*学生のコメントを引用するに際し、一部表記を修正し統一しています。

寄稿

九州大学「身体表現演習特講／文化事業マネジメント特論」との連携

長津　結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

昨年度に引き続き、このユースプログラムと、九州大学大橋キャンパスでの教育カリキュラムとの連携を行わせていただいた。昨年度は大学院修士課程の学生を対象とした連携となったが、今年度は学部組織である芸術工学部も加えたプログラムを行うべく、常設の科目にはできないがその際の社会的ニーズ等によって開設ができる「臨時授業科目」として、「身体表現演習特講」（学部）、「文化事業マネジメント特論」（大学院）として開講した。

このことには、昨年度の報告書に寄せた以下の文が手がかりになっている。

「今回の連携では、久留米シティプラザでの「新しい演劇鑑賞教室」のプログラムを体験するにとどまり、たとえば普段の学生たちのホームである大学に戻って、今回の体験を振り返るというような時間を十分に持つことができなかった。今後こうした機会がある際には、より学生たちの体験に寄り添うような教育プログラムを模索していきたい」

昨年度は単にユースプログラムを体験してもらうだけで終わってしまったが、芸術工学部・大学院芸術工学府の学生のニーズを鑑みると、この経験を踏まえてより得難い学びにしていくのはどのようにしたらいいか、ということを改めて考案し実施してみる機会となった。

学部教育においては、2020年に学部改組があって以降、アートマネジメントや舞台芸術に関するいくつかの科目を新規で開設し私自身が関わることになった。3年生を対象とした「アーツマネジメント論」では文化の公共性や芸術と関連分野との連携について座学で学ぶ。2年生を対象とした「身体表現演習I・II」では、地元でワークショップ・ファシリテーターとして活躍する古賀今日子さんをお招きしたワークショップと、全国で民俗芸能の継承に軽やかに携わる演出家の武田力さんをお招きしたワークショップを実施している。またそれ以外にも、美術の分野におけるキュレーションを考える授業や、芸術批評について実践的に取り組む授業など多様な授業が開設されている。

また大学院教育でも、海外でのアーツマネジメントの動向を知る授業や、文化政策について学ぶ授業、学生が普段専門的に研究している内容や関心のあることを活かして、大学内にとどまらない様々なプロジェクトを実施する授業などが開設されている。

このような流れの中で、今年度においてはこのユースプログラムとの連携もそのひとつに位置付けることで、単にプログラムに参加するだけでなく、そこから得た学びを芸術工学部・大学院芸術工学府での教育につなげる視点を持つことを考案した。

具体的には、「イミグレ怪談」とそれに関するユースプログラムに参加したあとに、日をおいて大学の

キャンパスで授業を行った。ユースプログラムもずっと見学いただいた田中瑛先生（芸術工学研究院助教。メディア・ジャーナリズム研究）にもお手伝いいただきながら、芸術作品に内在するコミュニケーションについて考察しつつ、最後には実際に実施されている公演を事例にあげ、自分だったらどのようなユースプログラムを考案するかというアイディアをレポートにまとめるような課題を出した。

課題で出されたレポート自体は非常にシンプルなものが多く、また構成自体もどことなくユースプログラムの構成を模倣したものも多かったが、その中でもテーマ設定などにそれぞれの学生ごとに工夫が見られた。ある古代ギリシアの物語に関する上演を取り上げ、物語の背景としてグループワークでギリシア神話の中の登場人物の旅のルートを新たに作成するワークショップ。戦時中に戦地に赴く主人公の葛藤を描く作品のプレレクチャーとして、演劇に見るコミュニティや共同体のあり方について考える企画。そのほかにもさまざまなアイディアがあがった。

これらの企画立案を通じ学生たちが得た視点というのもまた多様だろう。たとえばそれは、ひとつの作品というものが実に多面的な解釈をし得るものであるということもあるかもしれない。また、それゆえにプレレクチャーや対話の時間などのプログラムをつくることによって、なにかひとつの特定の方向性に人々を誘導してしまうという難しさもあるかもしれない。このことは同時に私たち自身がこのユースプログラムを考案・実施する中で常に感じてきた葛藤でもある。

芸術工学部・大学院芸術工学府は「高次のデザイナー」の育成をうたい、特に私が所属する未来構想デザインコース／大学院未来共生デザインコースは、社会のデザインやそこにある「仕組み」のデザインにフォーカスを当てている。こうした観点から、ユースプログラムに関わりこのような授業を新たに立ち上げることができた意味は大きい。舞台芸術そのものを教育・研究するカリキュラムだけでなく、作品がどのように聴衆に受け渡されるのかという点にフォーカスしながら、鑑賞するという時間全体を「デザイン」する、という経験を学生たちにとっては積む機会となっている。もちろんこれまでもキュレーターの仕事やプロデューサーの仕事を垣間見るような機会は大学の中にもあるが、より実践的に、かつ俳優や演出家などの舞台関係者が実際に動き、上演という空間を生み出している場に居合わせながら、実践的に考察できる機会は、またとないものだ。次年度も引き続き関わらせていただきながら、学びの場としてこの機会をどのように価値づけていくのかを検討し続けていきたいと考えている。